

エッセイ特集2 ヴィクトリア朝研究の現在

リリスの軌跡を辿って ——D・G・ロセッティ《レイディ・リリス》再発見から サザビーズのオークションまで——

加藤 千晶

レイディ・リリス 1867年

アダムの最初の妻リリス、言い伝えでは
（イヴを授かる前に、アダムが愛した魔女のこと）
蛇よりも昔、その甘美な舌は人をだまし
その魔性を帯びた髪は、最初に造られた黄金^{おうごん}だったという。
静かに腰を下ろし、大地が老いてもなお若く、
己をみつめ、神妙なるもの思いに耽りつつ
男たちを引き寄せ、織りなすきらびやかな網目を見つめさせる。
心臓^{こころ}も身体^{からだ}も生命^{いのち}も、そこに擲めとってしまうまで。

バラとジギタリスとポピーがリリスの花々。というのも
どこにもいはしないからだ、ああ、リリス、漂い来る馨り、
幽かに触れる指先、柔和な眠りが虜にしない男などは。
ご覧、あの若者の両の瞳^めがおまえの瞳^めを見て燃え立つその勢いで
おまえの魔力は若者の身体^{からだ}を駆け巡って真っ直ぐな首を折り、
その心臓^{こころ}を括り上げた——ひとすじの黄金^{こがね}の髪のなかに。

（筆者による訳。D・G・ロセッティの水彩画*Lady Lilith*（図1）の裏に貼られたロセッティ直筆草稿より。この詩は、後に若干の修正を加え、ソネット集『生の家』の第78番「肉体の美」となる。）



©Sotheby's

図1 D・G・ロセッティ《レイディ・リリス》(205.R.2.) 1867年、水彩、52×43cm、
個人蔵（日本の前所蔵家による写真提供）

1. 旅の始まり

1867年7月13日、イングランド北東部の港町タインマウスに居を構える典型的な中産階級の美術収集家アレグザンダー・ステイーヴンソン(1826-1900)は、前年に父から相続した事業により潤った資金で、新居を飾る絵画を購入しようとロンドンを訪れていた。お気に入りのラファエル前派の画家ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(1828-1882)のアトリエで、豊かな金髪の女性の絵に魅せられ、即、購入を決める。《レイディ・リリス》である。倍以上の値のついた油彩のオリジナルには手が届かなかったものの(これはリヴァプールのF・R・レイランドが購入、現在はアメリカのデラウェア美術館にある)、この水彩レプリカは、彼の邸宅を飾る重要なコレクションの一つとなった。

くしくも丁度150年後の同月同日に、権威あるカタログには「所在不明」と記載されながら東洋を旅したこの絵が、ロンドンのサザビーズで競売にかけられ里帰りするとは、当時誰が予想し得ただろうか。

*

本年7月13日、ロンドン時間14時(日本時間22時)開始のサザビーズのオークションの中継を、私は自宅のパソコンで注視していた。《レイディ・リリス》はロット番号7、直前のロット5、6のアルバート・ムーアも同じ日本の所蔵家の出品だ。ムーア2点は予想落札価格の下限に届かず、買い手がつかない。緊張が走る。《レイディ・リリス》は、40万から60万ポンドの予想だが、競売は25万ポンドから開始、2~3万ポンドずつ競り上がり、56万ポンドでハンマーが叩かれた。22時10分。手数料・税を含めると680,750ポンド、当日の為替の換算では、約9,973万円で売却された。落札者は公表されていないが、サザビーズを通して、メディアには“UK private buyer”と報道されることを希望したという。

*

この絵を私が「再」発見したのは、2013年に上野で開催された『夏目漱石の美術世界』展でのことだった。漱石の想像力に影響を与えた画家たちの作品を集めたという画期的な試みの同展の部屋で、リリスは、J・W・ウォーターハウスやJ・E・ミレイらラファエル前派関連の絵にさりげなく挟まれ

て、「もの思いに耽」っていた。1867年の水彩画。リリスの水彩画といえば、ニューヨークのメトロポリタン美術館のものが知られているが、それではなさそうだ。注意して見ると、モデルが腰かける椅子を覆う布の色が違う。所蔵先が明記されていないので、会場の係りの女性に尋ねると、おそらく個人蔵なので、詳細は書面で問い合わせしてほしいとのこと。受付で問い合わせの用紙に記入して依頼し、その後再度、手紙でも問い合わせをしたが、待てども回答は得られなかった。

II. ファニー・コーンフォースとリリスの伝説

ロセッティの絵画の最も権威あるカタログ(V・サーティーズ編)によると、『レイディ・リリス』の水彩画のレプリカは二作あるとされ、一つはメトロポリタン美術館蔵、もう一つ(205.R.2)は、「現在は所在不明」と記載されている。この作品の水彩レプリカが特に貴重なのは、オリジナルの油彩の人物の顔が、当初と違うモデルの顔に描き換えられており(パトロンの求めに応じてという見解が主流だが)、水彩画がオリジナルの元の姿の面影をとどめると思われるためだ。確かに、油彩の方の切れ長の目をしたアレクサ・ワイルディングの顔は、水彩のファニー・コーンフォースの柔和な丸みを帯びた顔と明らかな対照をなす。ヴェネツィア絵画風のファニーの豊かな美を愛したロセッティは、顔を描き換えた後、絵の前に座って両手で顔を覆い、「もう元の君ではないんだ!」と言って、指の間から涙が溢れ落ちるほどさめざめ泣いていたという(ファニー談。信憑性は定かではない)。ファニーは、ロセッティが妻エリザベス・シダル亡き後、1862年に移り住んだロンドンのチェイニ・ウォークにある邸宅兼アトリエの「テューダー・ハウス」に、「家政婦」として住み込んでいた女性で、1860年代のロセッティの、ティツィアーノに影響をうけた鮮やかな色彩の画布の数々で、輝きを放っている。彼女が元は娼婦であったことを示唆する伝記は多くあるが、近年は、シダルやジェーン・モリスとさほど変わらない労働者階級の普通の娘だったことが、実証的研究により明らかになってきた。

本エッセイ冒頭の詩は、この絵と同主題のソネットであり、伝説の魔女

リリスは、ロセッティの直接の発想源としてはゲーテの『ファウスト』なのだが、由来は古代メソポタミアにまで遡る妖怪で、その後ウルガタ聖書（イザヤ34：14）にも「ラミア」という訳語（「魔女」とほぼ同義）を当てられて登場する。「アダムの最初の妻」としてのリリスの話は、中世のユダヤ教のテキストに現れたのが確認できる最古のものらしい。ロセッティの詩のリリスには、原罪をそそのかす蛇を先取りするような曲線のイメージがあるし、また彼の後の詩「エデンの楽園（“Eden Bower”）」でも蛇女のリリスが描かれるが、伝説のリリスが古来より明確な蛇女の表象を持っていた訳ではない。おそらくロセッティがキーツの「レイミア」の蛇女に心酔していたがために（といっても、キーツの発想源のロバート・バートンの『憂鬱の解剖』は、ゲーテの『ファウスト』と同様、ラミアとリリスを別物として扱っているのだが）、ギリシャ神話のラミアとの混合が起こって、妖艶なりリス像が醸成されたのであろう。これがフロベールに端を発した蛇と戯れる女性像へのカルトと相まって、19世紀末のヨーロッパで特異なファム・ファタル像の流行を生んだことは、ブラム・ダイクストラに詳しい。

ところで、神話・伝説を題材としながらも、当の水彩画では、ロセッティが「現代のリリス」と表現したように、彼女は同時代の調度品に囲まれ、部屋着を纏った姿で描かれる。ファニーがモデルのやや丸顔のリリスは、蛇のイメージからは程遠く、1867年の時点のロセッティは、この水彩のリリスに関して、蛇女とは別の思惑があったようだが、これについては別の機会に詳述したい。

III. 1990年代、ロセッティ・アーカイヴ、所有者との面会

『夏目漱石の美術世界』展でこの水彩を「再」発見したと先に述べたことには二つ理由があり、一つには、私がこの作品を見たのは実は初めてではなかったらしいこと、もう一つには、この日本にある作品が205.R.2であることを認識していらした方は、おそらく以前にもいらっしゃったかもしれないということだ。後になって気付いたことだが、この作品は、1990年に渋谷のBunkamura ザ・ミュージアムで行われた「ロセッティ展」に出品されていたのである。日本では、1980年代後半から、ラファエル前派の

展覧会が幾度か開かれ、この分野に対する関心は高まりつつあったが、ロセッティ単独の本格的展覧会は初めてであり、当時、油彩の《レイディ・リリス》を始め、主要な油絵作品が注目を集めたように思う。たとえ205.R.2と認識されていても、来歴調査という動きには至らなかったのかもしれない。また、メトロポリタン美術館の水彩レプリカは、助手のヘンリー・トレフリー・ダンの手が増えられているために質が劣るとする見方があることから、この作品も同様にあまり評価されなかったことが考えられる（しかし後に登場するサザビーズのサイモン・トール氏は、日本にあった水彩画におけるダンの関与の可能性を否定している）。

私自身、展覧会に行ったことははっきりと覚えているし、今、手元にそのカタログがあるが、この水彩を見たことは、恥ずかしながら全く記憶にない。1990年といえば、『ユリイカ』がラファエル前派の特集を組んだ年でもある。私は修士課程の2年目で、少し上の世代の同分野の研究者の方々の活躍を眩しく眺めつつ、この特集号とは少しずれた号の同誌に、自作の詩が（実名ではなく）載ったりしていた頃であった。

＊

『夏目漱石』展の後、暫く日本の美術館からは情報を得られることなく時が過ぎたが、その後、私はロセッティの全作品を絵画・文学両面において網羅しているインターネットサイト「ロセッティ・アーカイヴ」を管理するアメリカの学者ジェローム・マッギャン (Jerome McGann) に、メールで問い合わせをした。1980年代にはマルクス主義のロマン派の批評家として活躍した著名な学者だが、D・G・ロセッティに関する論文・著書もあり、近年はラファエル前派研究に大きく関わっている（彼の姓のカタカナ表記は諸説あるが、ここでは、実際の音に近い表記にする）。マッギャン教授とは、2001年にケンブリッジで開かれた、ロセッティとその家族についての学会 (The Rossettis: Cosmopolitans in Victorian London) で実際に会って、一緒にサンドイッチを食べながら研究について話したことがあった。午前の研究発表時に質問をしていた私の発言が面白いと仰り、昼休みに話そうと言って下さったのだった。ラファエル前派の著名な研究者がほぼ勢揃いした、この一度限りの贅沢な催しが開かれたのは、通常より9年程遅れて私が博士課程に入学してから2年目のことだった。（この学会の内容は、

2004年に *Outsiders Looking in: The Rossettis Then and Now* という書籍として出版された。)

マッギャン教授は、この水彩レプリカが日本の個人蔵になっていることはご存じだったようだが、アーカイヴに掲載されている当作品の画像が違うことを私が指摘すると、日本の個人蔵に関しては、自分はどうすることもできない、日本にいるのなら所有者を探して、作品を確認することができるのではないか、という返答だった。

*

この絵をめぐって状況が動き出したのは、2014年の日本ヴィクトリア朝文化研究学会の全国大会の折に、十数年ぶりに筑波大学の山口恵里子氏にお会いしてこの件をお話しし、複数の美術館の様々な方々を通じて、当作品の所有者の方に連絡が取れるように、便宜を図っていただいたことからであった。その間、手紙や電話等による煩雑な連絡をお願いすることになり、大変なお手間をおかけしたことに感謝している。その甲斐あって、間に入っている様々な方々のご都合もあり、時間は要したが、2016年によりやく所有者の方に直接連絡できることとなった。海外出張中の山口氏の代わりに私は手紙をしたため、緊張しつつ投函すると、翌日、私の留守中に、《レイディ・リリス》の持ち主からの伝言メッセージが自宅の電話に入っていた。落ち着いた温厚そうな声に、ほんとに安堵したことを覚えている。

*

昨年9月17日、山口恵里子氏と私は新幹線に乗ってとある地方都市に赴き、駅からさらにタクシーで30分程の山腹にある建物の中にいた。奥の部屋から、『夏目漱石』展で見た水彩画が運び込まれてくる。間近に見るロセッティの筆遣いに、おもわず息を呑み、涙が溢れそうになる。さらに驚いたことに、絵の裏を見ると、手書きの草稿が貼ってある(図2)。ロセッティの直筆だ。この絵のために描かれたソネットである。その周囲に貼られたラベルも歴史的資料として重要なものだ。写真を撮らせていただき、「ロセッティ・アーカイヴ」のことをご説明し、インターネット上に写真を掲載する許可をいただくとともに、絵の入手経路や来歴について、教えていただけるようお願いする。所有者の方からは、絵の購入先の美術商の名前、おおよその購入時期(1993~4年頃?)、美術商の営んでいたギャラリー

の住所等の情報は得られたが、この美術商はすでに他界しており、ギャラリーも現存していないため、どのようにして日本にきたのかは皆目見当がつかなかった。Bunkamuraの展覧会に出品されていたことが鍵になりそうだったので、ミュージアムも含め、情報が得られそうな筋に、手紙、メール、電話等で問い合わせをしてみたが、手がかりは得られなかった。

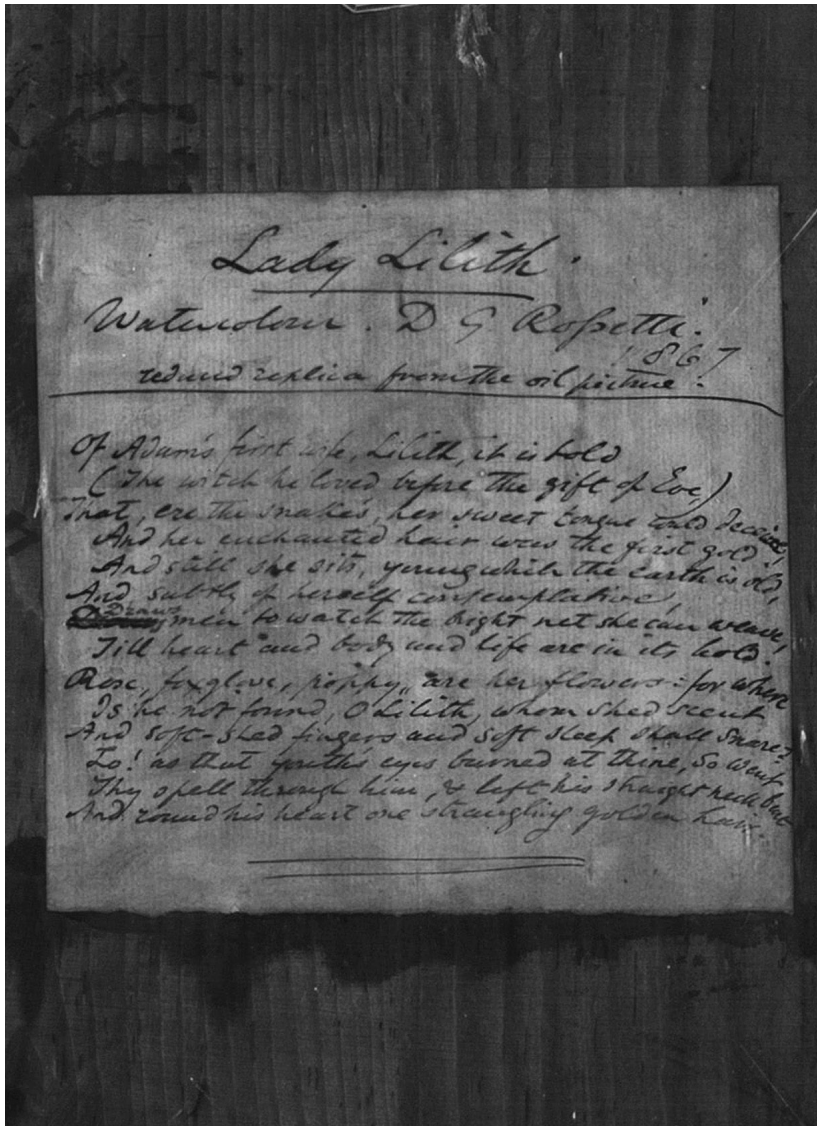
＊

今年3月、絵の裏の直筆草稿の写真を再び撮影するため、私は一人で再びこの地方都市に向かった。前回は、テープが貼られていて、全体が見える状態ではなく、草稿の画像と文字による転写が必要であるとのマッギャン教授の指示があったからである。緊張しつつ、少しヒビの入ったガラスに貼られたテープを剥がし、デジタルカメラで撮影するも、ガラスの上から、文字がすべて見えるように撮ることは難しい。かといってガラスを外すのは素人には危険である。複数枚撮って、あとはロセッティ・アーカイヴの技術者の腕に頼るほかない状態だった。

撮影した写真から、ロセッティの流れるような筆跡を転写した。その和訳が冒頭の詩だが、これはわずかな変更を加えつつ、1870年出版の初の自作詩集（この時のタイトルは“LILITH (For a Picture)”）、1881年版、1911年版の作品集に収められる。既刊の翻訳において、伊藤勳氏は1881年版、松村伸一氏は1911年版を底本としているが、両版におけるこの詩のテキストは同一であり、この草稿とは7、9、11行目のみが若干異なる。草稿の原文は、いずれ学術論文とロセッティ・アーカイヴにおいて発表される予定である。

さて、今回も、所有者の方は、絵を購入した状況について、知る限りの情報を与えようとしてくださってはいたが、購入時の領収書などはなく、購入先の美術商が、ある歴史上の人物の子孫であること、美術品購入にサザビーズと取引していたこと以外に、直接来歴と結びつきそうな手がかりはなかった。

研究者の仲間たちからの提案により、日本ヴィクトリア朝文化研究学会のメーリングリストで情報を募ったのも、この頃である。本学会の川端康雄会長のお知り合いの方より、この美術商の家系の正統の家系図を、提供していただいたことが大変有難かった。



©Sotheby's

図2 《レイディ・リリス》の裏面に貼られたソネットのロセッティ自筆草稿
(日本の前所蔵家による写真提供)

IV. 情報入手、サザビーズへ

メーリングリストからいただいた情報から直接結びついた訳ではないのだが、3月末に、美術商のご親族と間接的に連絡を取ることができるようになり、メールに添付した絵の画像を見ていただくことで、この水彩画を確かに所有していたという、別の親族の方に辿り着くことができた。研究目的のための問い合わせであることを信用していただくのに、かなりの努力と忍耐を要したが、ようやくメールでの質問に応じてくださった。ここで初めて、この絵は「サザビーズかクリスティーズのオークションで1986～7年頃」に落札されたことがわかったのである。

サザビーズかクリスティーズ、どちらなのかはわからない。しかし、所有者のところには、別の美術品購入時のサザビーズの書類が残されていたので、サザビーズの可能性の方が高い。そこで、まず東京オフィスに電話をしてみた。しかし、この美術商が顧客として登録されていたことはわかったものの、本人のアカウント番号、オークションの開催地、ロット番号などの情報がないと、それ以上は調べようがないし、教えることもできないらしい。ロンドン本社に問い合わせてもおそらく同じ対応であろう、とのことだった。救いは、オークションの際に必ず作られるというカタログを探すことだった。そこには必要な情報がすべて載っているに違いないからだ。しかし、オークションは世界各地で頻繁に行われていて、似たようなタイトルのカタログは、数年間の間に星の数ほどある。

まず私は大英図書館の蔵書をオンラインで検索しようとしたが、本の中身まではすぐに見ることができないので効率が悪く、断念した。次に、海外のインターネットの古本屋で、Bunkamuraの展覧会以前、つまり1980年代後半の、サザビーズのそれらしいタイトルのオークションカタログを片端からリストアップし（中にはネット上で出品された作品が確認できるものもある）、その本屋に次々とメールで、当の水彩画は載っていないか、と問い合わせた。ほとんどの古本屋は、丁寧にカタログをチェックしてくれ、リリースは載っていないけれど、ロセッティの別の作品ならある、というような機転のきいた対応をしてくれた。疲労が蓄積されてきた頃に、温かい人情にふれて、思わず目頭が熱くなった。このようなことを暫く続け

でも、一向にお目当てのカatalogは見つからず、体調を崩して熱を出していた4月末の連休前、ふと、サザビーズのロンドン本社に一度問い合わせはどうだろうかという思いが、私の頭をかすめた。

早速ホームページで、どの部署に問い合わせるべきかを調べる。ヴィクトリア朝とラファエル前派の部門があるのを見つけ、その責任者に宛てて、これまでの経過を説明したメールを送ると、3時間ほどで返事が返ってきた。急いでメールを開いた私は、思わず我が目を疑った。そこには、当の水彩画が出品された1988年のオークションカatalogの表紙と該当頁がスキャンされたものが添付されており、ロセッティがスティーヴンソンに絵を売った後の来歴がすべて記されていたのだ。

*

私が問い合わせをしたサザビーズのサイモン・トール氏は、後に聞いたところによると、同社でも変わり種といわれるほどの学究肌で、問い合わせに対して図星の回答をいとも短時間で送ってくれたのだ。そして、このような迅速な情報提供をするだけでなく、彼にはもうひとつの目的があり、この作品を再びオークションに出すことを提案するのだった。かつて日本人の美術商が落札したときよりも、相当高く売れる見込みがあると熱心に勧められ、ロセッティの重要な作品の持ち主をこのままサザビーズに紹介してよいものかと困惑した私は、まずジェローム・マッギャンに相談した。すると、所有者の方への公正さを考えるなら、サザビーズの申し出を伝えざるを得ないが、絵を引き渡す前に、プロが撮影した前面と裏面の高画質のデジタル画像を学術用に入手する必要がある、とのことだった。所有者の方にこのことをお伝えすると、数日考慮なさった後で、絵は手放す方向で考えたい、写真は、知り合いのプロの写真家に頼んで(地元の写真館で撮って)提供しましょう、というお返事をいただいた。

この所有者の意向をサザビーズに伝えた5月8日、日・英のサザビーズのスタッフの間では、夜遅くまで(イギリスでは昼だが)興奮気味の熱いメールが飛び交ったという。

翌日5月9日、トール氏より紹介されたサザビーズ東京オフィスの担当者へ電話をして、所有者の方を紹介し、写真のことを伝え、写真撮影の予定の11日に、写真館に同行して、撮影方法等を一緒に確認、その後

商談も済ませたいとのことである。結局、両者を紹介後4日のうちに、話の方向は決まってしまった。この時点で、通常のオークションの申込期限である3か月前をすでに切っていたが、このような重要な作品は特別とのことで、普通は出品者負担の輸送費(保険料も含めて、30~50万円)も、サザビーズの負担であった。また、もし今回を見送れば、次のヴィクトリア朝・ラファエル前派のオークションは半年後なのだが、買い手がつく時とつかない時の波があるらしく、今が好機と勧められたのである。

ロンドン本社経由で入手したデジタル画像のファイルをマッギャン教授に転送すると、「長いプロセスだったけれど、確かにその価値のあることだ」というお返事をいただいた。連日、海外とのメールのやりとりで日本時間を忘れるほどの日々であったが、この言葉ですべてが報われた思いがした。

*

《レイディ・リリス》の水彩は、5月25日に英国へ旅立った。翌日、サイモン・トール氏からは、その美しさに大層感動した様子(“utterly beautiful”)を語るメールが届いた。早速、カタログの解説の作成に取りかかり、何回かメールでのやりとりをした後、6月半ばにリリスが表紙となった美しい冊子が仕上がった。同じ情報は、画像と共に、同時期にサザビーズの公式ウェブサイトでも公開された。(これはオークション結果とともに、現在もウェブ上で見ることができる。<<http://www.sothebys.com/en/auctions/ecatalogue/2017/victorian-pre-raphaelite-british-impressionist-art-l17132/lot.7.html>>)

オークション前の数日は、出品作品は一般にも展示・公開されるが、その間、この絵を実物さながらに模したウィンドウ・ディスプレイが、鮮やかな花々に囲まれて、通りからも見えるように配置されていた。オークションごとに変える凝った趣向である。ウィンドウ越しに佇むリリスは、日本で過ごしたこと、愛されたことを懐かしんで、ひとり静かに「思いに耽」っているように見えた。

V. リリス出現!?

オークションの翌週、私は資料を探そうと、試験勉強の学生達で混雑す

る大学図書館にいた。地下書庫へ行こうと外に出て、真夏の太陽が照りつける中、建物の脇の通路を歩いていると、目の前を、一匹の蛇がゆっくりと横切り、優美なとぐろを巻きながら、隣の茂みの中へと消えていった。目撃者は私だけだったようだ。これを聞いた出納の女性が目をまるくして仰天していたところを見ると、よく見かけられる住人ではないらしい。

しばらくしてから、あ、リリスだったのかもしれない、と思った。

都会の炎天下で蛇を見るなど、生まれてこのかた経験したことがなく、あまりに絶妙なタイミングである。思えば、この絵と関わる中で、予想外の不思議な力を感じることが度々あり、私はその力の“agent”にすぎず、まるでロセッティが、墓の向こうから合図を送っているようにも思えた。

《レイディ・リリス》は、きっと、祖国へ帰りたかったのだろう。

見上げると、青空と雲の彼方に、ダンテ・ゲイブリエルの悪戯っぽい笑顔が見える気がした。

ありがとう、ゲイブリエル。Grazie di tutto.

ご助力をいただきました多くの方々に、心より御礼申し上げます。

References

- Clifford, David and Laurence Roussillon, eds. *Outsiders Looking In: The Rossettis Then and Now*. London: Anthem, 2004.
- Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture*. New York: Oxford UP, 1986.
- Drewry, Anne and Christopher Whittick. “Representing Fanny Cornforth: The Making of an Historical Identity.” *British Art Journal* 2.3 (2001): 3-15.
- Elzea, Rowland. “Lady Lilith.” *The Samuel and Mary R. Bancroft Jr. and Related Pre-Raphaelite Collections*. Wilmington: Delaware Art Museum, 1984. 114-17.
- “Lilith.” *A Cyclopædia of Biblical Literature*. Ed. John Kitto. 3rd and enl. ed. Edinburgh: Adam and Charles Black, 1864.
- “Lilith.” *Encyclopedia of Religion*. Ed. Lindsay Jones. 2nd ed. Detroit: Thomson Gale, 2005.

- Macleod, Dianne Sachko. *Art and Victorian Middle Class: Money and the Making of Cultural Identity*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Marillier, H. C. *Dante Gabriel Rossetti: An Illustrated Memorial of His Art and Life*. London: Bell, 1899.
- McGann, Jerome. *Dante Gabriel Rossetti and the Game That Must Be Lost*. New Haven: Yale UP, 2000.
- Nineteenth Century European Paintings Drawings and Sculpture: London Tuesday 21st June 1988 at 7:30pm*. London: Sotheby's, 1988.
- Rossetti, Dante Gabriel. *Ballads and Sonnets*. London: Ellis, 1881.
- . *The Complete Writings and Pictures of Dante Gabriel Rossetti: A Hypermedia Research Archive*. Ed. Jerome J. McGann. 2008. U of Virginia. <<http://www.rossettiarchive.org/index.html>>
- . *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*. Ed. William E. Fredeman. 10 vols. Cambridge: Brewer, 2002-2015.
- . *Poems*. London: Ellis, 1870.
- . *The Works of Dante Gabriel Rossetti*. Ed. William Michael Rossetti. Rev. ed. London: Ellis, 1911.
- Rossetti, William Michael. *Dante Gabriel Rossetti as Designer and Writer*. London: Cassell, 1889.
- Stevenson, Hew. *Jobs for the Boys: The Story of a Family in Britain's Imperial Heyday*. London: Dove, 2009.
- Surtees, Virginia. *The Paintings and Drawings of Dante Gabriel Rossetti (1828-1882): A Catalogue Raisonné*. 2 vols. Oxford: Clarendon P, 1971.
- Victorian, Pre-Raphaelite & British Impressionist Art: London 13 July 2017*. London: Sotheby's, 2017.
- 加藤千晶 「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの『写実主義の狂気』」『文学・史学』（聖心女子大学大学院機関誌）第13集、1991年、21-41頁。
- 「『秘密のないスフィンクス』における戯れの構造——ロセッティの美女達との関連を通して」『オスカー・ワイルド研究』（日本ワイルド協会）第1号（1999年）23-35頁。
- 「変容する中世の夢——『つれなき美女』その後」『イギリス・ロマン派研究』（イギリス・ロマン派学会）第24号、2000年、59-67頁。
- 「D. G. RossettiのWorks未収録作品Jan Van Hunksをめぐる3つの謎」*Round Table*（慶應義塾大学高宮研究会）第15号、2001年、69-90頁。
- 「顔/境界の彼方——D・G・ロセッティの無表情な美女たち」『文学と絵画——唯美主義とは何か』英宝社、2005年、25-55頁。
- 「ベアトリーチェの造型——D・G・ロセッティのダンテ『新生』翻訳再考」『中

- 世主義を超えて——イギリス中世の発明と受容』慶應義塾大学出版会、2009年、299-322頁。
- 「『ジョルジョーネ風の炎』の変奏——ペイターとD・G・ロセッティをめぐって」『ペイター「ルネサンス」の美学 日本ペイター協会創立五十周年記念論文集』論創社、2012年、65-83頁。
- 『夏目漱石の美術世界展』東京新聞／NHK プロモーション、2013年。
- ロセッティ、ダンテ・ゲイブリエル 伊藤勲訳『いのちの家』書肆山田、2012年。
- 南條竹則・松村伸一編訳『D. G. ロセッティ作品集』岩波書店、2015年。
- 『ロセッティ展』東京新聞、1990年。

取材協力：サザビーズ ロンドン／東京オフィス

——東京外国語大学非常勤講師